

熱原法華講衆の信心を学ぼう

熱原法難とは、文永11年（1274）、日蓮大聖人が身延に入山されたあと、日興上人は甲斐（現在の山梨県）・駿河と伊豆（現在の静岡県）方面の布教を開始され、短期間の内に多くの人々が入信しました。

真実の教えを求めた熱原の百姓達は、日秀らの折伏によって続々と入信していきました。後に三烈士と言われる、神四郎・弥五郎・弥六郎の三人も、弘安元年（1278）には入信して、農民信者達の中心者となっていたようです。

しかし、院主代の行智はこれが気に入りませんでした。まずは日秀達に「法華経を捨てて阿弥陀経を読み念仏を称えろと誓約書に書けば居住を許す」、と迫りました。道念篤い彼等はこの脅迫に屈しませんでした。日禅は親類を頼って竜泉寺を出ましたが、身寄りの無い日秀と日弁はそのまま滝泉寺領内に止まって布教を続けました。

弘安2年（1279）4月8日、行智の悪巧みは熱原の法華講衆にも及びました。流鏑馬（やぶさめ）の行事の時に熱原法華講衆の一人の四郎男が、雑踏の中、何者かによって切りつけられました。これは、信心をやめなければ、次は誰かの命を取るぞと言う脅し以外の何ものでもありませんでしたが、法華講衆は怯むことなく信心を続けました。

しかし、同年8月には、弥四郎が斬り殺されてしまいます。日蓮大聖人はこの状況を鑑みて、大進房と三位房という二人の弟子を派遣しましたが、この二人は白刃舞う現実を目にして恐怖し、行智の奸計に乗せられて、退転して行智に付いてしまいました。

同年9月21日、富士熱原地方一帯は稲穂がたわわに実り、黄金色の風景が広がっていました。農民達は手分けして協力し合い稲刈りをしていました。すると、そこに刀や弓の武器を手に、行智配下の大勢の農民や武士達が押し寄せてきました。そこには退転した大進房の姿もありました。

更に彼等は、日秀の水田のみならず、熱原法華講衆の田畠の稲を強引に刈り取り奪っていきました。法華講衆は必至に抵抗しましたが、神四郎以下20名が捕縛されました。

鎌倉に押送された法華講衆には、事件の顛末に対する取り調べは一切なく、かわりに行われたのは平左衛門尉頼綱の子、飯沼判官による臺目（ひきめ）の矢による拷問でした。臺目の矢とは鏃（やじり）の代わりに木製の音の出る鏃（かぶら）を先端に付けたもので殺傷力はありませんが、当たれば相当の苦痛と音による恐怖心を与えます。拷問の理由は事件と関係なく、「法華経を捨てて念仏を称えよ」という理不尽なものでした。

これをお聞きになった日蓮大聖人は、すぐに門下一同に対して『聖人御難事』という御書をしたためられ、激励されています。

「熱原の者達をみんなで励まして、決して退転させてはなりません。彼等にはこう言い聞かせなさい。『ひとえに思い切って覚悟を決めなさい。よい結果となれば不思議、悪い結果となるのが必然だと思いなさい。ひもじいと思うのであれば餓鬼道を教えてあげなさい。牢が寒いと言えば八寒地獄を教えなさい。拷問が恐ろしいと言えば鷹に食われようとしている雉、猫に食われようとしているネズミをひと事だと

思うではない』

(御書1398頁・取意)

この御書を拝した日興上人をはじめとする門下一同は、熱原の法華講衆を励ましました。熱原の法華講衆もお互いを励まし合い、誰一人退転しませんでした。どんなに墓目の矢で射られようとも、高らかに御題目を唱え続けました。

そして十月十五日、平左衛門尉頼綱は、無慚にも神四郎・弥五郎・弥六郎の中心者三名を斬首の刑にしました。彼等は最後の時まで、御題目を唱えました。

さて、この熱原法難は、国家権力という強大な力を背後にした平頼綱の迫害に屈せず、一介の農民達が不退転の信心を貫き通したことに深い意義があります。日蓮大聖人は、この熱原法難を鑑みられ、世界中の全ての人々が帰依すべき一閻浮提総与の大御本尊、すなわち本門戒壇の大御本尊御建立の機縁とせられました。

そして、『聖人御難事』に、

仏は四十余年、天台大師は三十余年、伝教大師は二十余年に、出世の本懐を遂げ給ふ。其の中の大難申す計りなし。先々に申すがごとし。余は二十七年なり

(御書1396頁)

とお示しのままに、弘安2年(1279)10月12日、出世の御本懐である本門戒壇の大御本尊を御建立遊ばされました。

本門戒壇の大御本尊は、第二祖日興上人が『日興跡条々事』に、

日興が身に宛て給はる所の弘安二年の大御本尊は、日目に之を相伝す。

(御書1883頁)

と、日目上人に御付嘱になられて以来、歴代の御法主上人によって総本山大石寺に相伝・嚴護され、広宣流布の暁を待っておられます。

このように、私たち法華講衆の信心の原点は、まさしく熱原法難にあります。私達は、熱原法華講衆の信心を我が身に当てて大御本尊への信心に絶対の確信を持って、どのような苦難や障魔が起ころうとも御題目を唱えて、異体同心の団結をもって縁のある人々に下種折伏してまいりましょう。

御法主日如上人猥下は、

障魔が競い起きた時こそ、むしろ信心決定の絶好の機会と捉え、妙法受持の大功德を確信し、朗々と題目を唱え、毅然と魔と対決して粉碎していくことが大事なのであります。いかなる障魔も、仏様には絶対に勝てないのでありますから、この確信を持って、いかなる障魔が競い起ころうとも、いよいよ信心堅固に異体同心にして折伏に励み、必ず誓願を達成されますよう心からお祈り申し上げ、本日の挨拶といたします。

(大日蓮840号45頁)

と御指南であります。

私達日蓮正宗僧俗は、この異体同心・忍難弘通の御指南を深く心に留め、一生空しく過ごして万歳悔いることのないよう、遠くは広宣流布大願成就のため、近くは2021年、宗祖日蓮大聖人御聖誕800年の御命題である法華講員80万人体勢構築に向け、各国各支部の折伏誓願目標達成をめざし、ご精進頂きたいと念願致します。